

**BiVS の本だな** **第12号**  
図書館学生サポーター **ビボス**  
Bibliothek Volunteer Supporters



先生に訊いてみた

本とともに生きた人生など、

第六回  
ドイツ語学科  
工藤達也先生

研究に本はつきものです。普段どのくらい読むかなどは人によって違えど、全く本（活字）のない研究などは理科系であってもありえません。そんな本とともに生きる先生方の人生に興味をもった我々BiVSは、本の良さや、本との人生を聞きに、獨協大学の先生方にインタビューを試みました。

図書館学生サポーターのしんぶん『BiVSの本だな』では、6回にわたり6人の先生方のインタビュー記事を掲載します。

大好評連載の最終回は、ドイツ語学科の工藤達也先生です。



## 工藤達也先生

Tatsuya Kudo

所属 外国語学部ドイツ語学科

専門分野 ドイツ近・現代文学批評

取材者 ドイツ語学科3年 木村 沙也加

国際関係法学科4年 川名 勇

工藤先生が紹介された本

- ・『時間と自己』木村敏著，中央公論社，中公新書 674，1982【C-112-Ki39】
- ・『木村敏著作集2 時間と他者／アンテ・フェストウム論』木村敏著，弘文堂，2001【493.7-Ki39k-2】
- ・『生命と現実 木村敏との対話』木村敏、檜垣立哉著，河出書房新社，2006（※本学には、この増補版が所蔵されている【493.71-Ki39s】）
- ・『芽むしり仔撃ち』大江健三郎著，講談社，1958【913.6-O18mc】
- ・『豊饒の海 春の雪』三島由紀夫著，新潮社，1969【913.6-Mi53h-1】

今回は、外国語学部ドイツ語学科の教授、工藤達也（くどうたつや）先生にインタビューをしました。お昼休みの短い間でのインタビューでしたが、とても濃い内容となっております！以下、主な質問項目です（↓）。

- ・お気に入りの書店
- ・学部生のときに影響を受けた本
- ・独自の読書法
- ・今読み返したい本

それでは、どうぞ！



—まず、先生のお気に入りの書店を教えてください。

そうですねえ、お気に入りの書店は Amazon ですね…。いや冗談ですよ（笑）。

—Amazon は便利ですからね。

Amazon は便利ですよ、だって古本だってね、簡単に手に入るしねえ…。

—それでは、先生が大学学部生の頃に影響を受けた本、その後の専門に進むきっかけとなった本を教えてください。

学部生のときに読んだ本は、木村敏（きむらびん）っていう、京都大学医学部の臨床のですね、精神科の先生がいて…。で、僕が 18 か 19 の頃かなあ、ちょっとそういった哲学とか思想に関心を持っていた人、まあ友達がいて、それでその人に「これ（『時間と自己』木村敏著、中央公論社、中公新書 674,1982）がいいよ」って読まされたんだけど…。

例えば、20 世紀の現代思想で、ハイデガーとか現象学のフッサールとかを知る前に、この本で、実感としてどういったことが現代思想において問題なのかが具体的にわかる。この人の書いていることは、患者さんが苦しいっていう部分から入っていくので、そこでもって、「人間にとって時間の意味といったものは大事なんだ」とかね、「時間の観念がない人間は本当につらいんだ」っていったことを分かせてくれる。しかもですね、ここにもありますけれど、様々な俳句や音楽などでもって、「なんで我々は音楽を聴いて感動するのか」とか、俳句のあの五七五でもって、「何が語られているのだろうか」といったことなど、それらすべてを、時間などといったことでもって説明してくれる。そういった意味で、非常に実感のこもった哲学書…というか、まあ入門書だよな。中公新書で、もうたぶん絶版だと思います。もしこれがなければ、木村敏著作集（『木村敏著作集 2 時間と他者／アンテ・フェストゥム論』木村敏著、弘文堂、2001）というものがあるので。

やっぱり、まわりにハイデガーとかやっている人がいっぱいいて、ハイデガーの原書を読むサークルとかあったりしたのよ。そしたら、ドイツ語でもって、しかも、ドイツ語の学習 1 年か 2 年でもってハイデガーを読めるっていうのは一瞬すごいと思うでしょ、一瞬ね。一瞬ね（笑）。実はハイデガーのドイツ語は簡単なのよ。本当、簡単なんですよ。語彙が少ないから。「存在」、「時間」、「虚無」しかないから。そういった意味では、ドイツ語も読みやすいし…。だからハイデガーが（人々に）受けたのよ。複雑な文体で書くんじゃなくて、「たっただっただっ」って書く文体なので、それこそ関係代名詞とか分かっていれば読めちゃうっていう…。接続法とか難しいこともやらないし。本当に読みやすいドイツ語でもって書かれているので、こんなに分厚い本でもそんなに時間がかからない。難しいことを分かりやす



いドイツ語で書いたから受けたんだね。しかも当時の暗い雰囲気、第一次世界大戦後の暗い雰囲気に呼応して、哲学書がめずらしくベストセラーになったのよ。そういった意味では、ハイデガーの哲学を理解する、第一歩としてこれを読んでいくと、例えば、デジタル時計だと時間が分からないよね、とかね。時間の「意味」が分からないっていうわけよ。時間は分かるよ。時刻は分かるよ。でも、時間の「意味」は分からないでしょっていうこと。「ああ、締め切りがもう少しだあ…」とかね。そのハラハラ感、ドキドキ感があるじゃないですか。でしょ（笑）。アナログ時計なら分かるっていうんだよ、木村敏は。大体、間（あいだ）でもって時間を示してくれるから。デジタル時計は時間を間で示してくれないっていうのが、木村敏の、まあ極端な話かもしれないけれど、比喻で話してくれる。そういった意味でこれは読みやすいと思います。だから、これでもって哲学に入っていくってのがあるな…。僕、哲学の専門家じゃないんだけど、これを見て、ああハイデガーとかかっこいいなとか、読めるなと思ってきたよね。それでまわりが、それで議論するのが好きでっていう…。それこそあれですよ、友だちから紹介してもらった青春の一冊！30年前！こんな本を読んで、いまやこうなっちゃいましたっていう（笑）いやあ、これはいい本だと思うねえ…。

——なるほど…。

木村敏は精神分析の人で医学者なんだけれど、ドイツ語の翻訳書も出しているのね。でもって、何をやったかといえば、ドイツの詩の韻とかリズムとかに関する教科書があって、それを彼が翻訳したんだよね。音楽をやる人なんだよね。音楽を、素人なんだけれどやっていて、「人間との間とか距離とかいったものが音楽には現れてくるもので、そういったものを感じ取らなかつたら、基本的に音楽というものはできません」って。やっぱり、「そこに共有されている時間があるんだ」といったことを淡々と語ってくれる。これもいい本ですな。木村敏を読むと、なんだか、いい方向でもって、現代思想が語られる感じがします。これがやっぱりドイツ語に入ったところの、なんかこう…木村敏のせいだな（笑）。木村敏とハイデガーのせいですね。

——（笑）

いやあね、語学ばかりやっても、しっかりとしたしたものなかつたら、向こうに行っても人が話を聞いてくれませんよ！「自分はこういう勉強をしてきた」、「こういったことをやりたいんだ」ということをしっかり言えなかつたら、ちゃんと相手にされませんよ。だから本を読みなさいとか言って。学校の勉強ばかりしてりゃいいっていうわけじゃない。あなたの存在の意味、時間を考えなさいって。人とおしゃべりするのでもいいけど、独りで考える。そういった時間が大事、時間の意味を実感するためには。木村敏みたいな本を独り読んで、「アナログ時計っていいもんなんだ」とか浅はかでもいいから自分なりに思って。そしたら「あ、勉強しなくっちゃ」とか思って、焦るでしょ。その焦りも、それこそ存在の意味なんだよ。

—ありがとうございます。ちなみに、日本語でなくてドイツ語で書かれた本だと、どのようなものを大学生の時に読んでいましたか。

ドイツ語の本ですか…。そうですねえ、僕は、ヘッセを読んだな。ヘルマン・ヘッセ。ヘッセは読めるよ。ドイツ語初習者だからといって、「本格的な小説を読めるのかしら」と思うかもしれないけれど、意外と読めちゃうよ。例えば、僕が大学1年か2年の段階で、先生が「もうお前が勝手に勉強して読め」って言ってた時代だよ。「読めるから」とか言ってポーンって。「読めませんよ、先生」って言って。でも、なんだかんだ言って、クセをつかんじゃえば、意外とああいったノーベル賞作家の文体…ヘッセは意外と分かりやすい文体で書いてくるので、読めちゃうね。内容も結構わかりやすい。子どものときにいじめられたとかさ。蝶をつぶしたとかさ。朝起きたらスッキリしたとかさ。ヘッセいいと思うな。読めますよ。特に、洋書は獨協大学の図書館にいっぱいあるんだから、しかも開架であるんだからね。そこから選んでみて、読んでみれば。読めなかったら先生に教わればいいんだよ。ヘッセくらいは読めますよ。本当に。ドイツ語で最初に何かやってみて、力試しという感覚でやれば結構ヘッセは読めちゃうので。何か、自分で知っているヘッセの小説を日本語でもいいから、まず読んで、そこからドイツ語のものを読んでもいいし、ドイツ語のものを読みながら、日本語のものを読んでもいいし…。

難しいなって思うものにチャレンジする気持ちがちょっとあったほうがいいね。勘違いしたほうがいいですよ、一回ね。「俺、頭よくね？」とか、「ハイデガー読めちったんじゃないかね？」とか言って。「ええ！？私ハイデガー読めちゃった」、「木村敏バンバン分かっちゃうし」とか言って。「存在意味って何かしら」、「あと一秒一秒大事にしたい」、「二度と時間は戻ってこないの！」とかね。そんな「気持ち悪い」世界を堪能してください。本当に読めると思うよ。

—先生独自の読書法はありますか。

独自の読書法…。あのね、ないんですよ。というかあのね、何で本を読むかっていう理由が非常に簡単。時間つぶし。だって若いうちにCDを買ったり、カラオケに行ったりするよりも、本ってさ、基本タダじゃん。図書館に行けば。それで一冊読み終わるのに何時間もかかるじゃない。そういった意味で、本を読んでいる時に思ったのは、レコードを買うよりもこっち（本）のほうが「安い」なって思ったんだよ。

—なるほど。

お小遣いをこっちのほうが圧倒的に使わないんだよ。こっちのほうが。

——で、長い時間楽しめるっていう…。

そうですね。そんなわけの分からない理屈があって…。CDとかレコードとか3,000円したもんね。だから、新品でレコードを買うっていうのはやっぱり、若者はそういった洋楽とかレコードをコレクションするのが好きで、ブランドのものを手に入れた感じがして、集めるじゃない。そうすると、あっという間に何万円と飛んでいくじゃない。でも本って200円とか、300円…これは520円か。520円とかそういう値段でもって安いっていうことが結構あって。高いのは高いよ。ハードカバーとかはね。

やっぱりね、文庫本や新書を大事にしたほうがいいね。新書がいいよ。何で新書がいいかって…やっぱり、この薄さでもって頭を使うエッセンスがあるから、いいと思うなあ。新書でもって、ちょっと抽象的な思考を鍛える感じがいいと思うな。そこから、専門書に入っていく。木村敏からハイデガーでもいいし、フッサールでもいいしっていう…。ドイツ語の現象学の本に入っていくてもいいしっていう世界なんで…。やっぱり新書はいいと思うよ。僕は基本的に新書から入っていくよ。新書から入っていくって、ああ、こういう世界があるんだと知って、専門書に入っていけば…、それから専門書を積み重ねるように読めば卒論が書けるので。新書から入っていくって、新書をズラッと読んで…。新書を読んで、自分で学習して、それで分からないことは先生に聞けばいいと思うなあ。まず、分からない知識があったら新書から入っていく。新書は権威ある大学の先生が書いているなら、まずハズレはない。

特に哲学書とか精神分析とか、そういった思想系のものに関しては、新書から入っていくのがいいと思うね。ニーチェだってそうだよ。ハイデガーもそう。フロイトもそう。ここから入っていかないと実感をつかめないよ。知識として、こういった入門書から入って、広がっていくっていう実感がないと、それこそ時間的な広がりもないし…。だから、まずはこういったものから入っていくのがいいと思うな。

——とっつきやすいですよ、新書は。

そうそう、とっつきやすい。でも、それで終わっちゃうといけないんだけどね。そこから先に、専門があるんでね…。

あ、あとね、学部の頃は大江健三郎が好きだったよ。『芽むしり仔撃ち』（『芽むしり仔撃ち』大江健三郎著、講談社、1958）っていう…。で、問題はですね、最近の、50歳を過ぎてからの独自の読書法。昔読んだ本を読み返すんですよ！30年前の青春に返って、そのころ読んだ本を読みなおしてみるんですよ。読んだ記憶がないっ！（笑）忘れてる！それが新鮮。「人間、経験も記憶もへったくりもねえや、全部忘れてるんだ」っていう、そのショック。「あっ、人間ってやっぱり忘れる動物なんだ」っていうね。だって、『芽むしり仔撃ち』ってこんな小説だったっけとか、へえ～とか言って（笑）。

——新鮮な気持ちで読めますね（笑）。

新鮮だよ！びっくりしちゃったよ！俺、ほんとの人大好きだったんだよね。せつなくて、なんか、甘酸っぱい感じがして…。でも（今読み返して）、「全然甘酸っぱくないじゃん！」って。「しかも怖い話じゃん、これ…」とかね。あの、戦争のときに不良がいて、感化院（かんかいん）っていうんだけど、精神病院と少年院が一緒になったような場所があるのね。で、爆撃がひどくなっちゃって、そこから逃げる話。当然捕まりますよ。（『芽むしり仔撃ち』というタイトルにあるように）「芽むしり」だから。芽をむしって、仔を撃つってわけだから。この中に現れてくる世界が、非常に切なかったっていう記憶があるんだけど、今読みなおしてみたら、「怖えなあ…」って。1回読んだんだけど、1回しか読んでいないものを読み返してみたら、全部忘れていたそのショック。そのショックを味わい返すっていうのもあるし、「自分っていい加減だなあ」っていうこともあるし…。「1回読んだだけじゃ分からない」といったことをね、何年か経ってからようやく分かるって感じですよ。今読み返したら、全然違うと思うね。「こんなことを言っていたんだ」って感じだよなあ…。

やっぱり、捉え方が違うと、「昔読んだほうがよかった」とかありますよ。要するに、30年前に読んだもののほうが味わい深かった、ということもあったりするので。その自分の感覚の違いみたいなものを確認するために、もう1回読みなおすのはいいことですね。ニーチェもそうだよな。昔読んだのよ。読んだのに、見事に忘れていたんだよ。だけど、それを講義のときに使うから、かえって、「昔読んだほうがよかった」とか、「今のほうがよかった」とか、比較ができるんだよな。それは面白い読書法だね。まあ、君たちのように若いうちには分からないかもしれないけど…。

——ではそういう形で、今読み返したいと思っている本はありますか。

『芽むしり仔撃ち』ですね（即答）。大江健三郎とかね、最近読んでいませんよ。いやあね、とにかくさ、頭がよいていうふりをしたかったから、友人から「工藤、あれだよな、大学に入った人は本棚いっぱい本くらい並べなくちゃカッコ悪いよな」って言われた瞬間に、「うん！そうだよな！」とか言って洗脳されちゃって（笑）。それでやってみたら、本棚いっぱいどころか、俺の個人研究室を見ればわかるけれども、足の踏み場がなくなっちゃったりって言う（笑）。

——（笑）その友人の方は、その後どうされたのですか。

あやつは、大学受験に失敗して語学の専門学校に通ってから——インドに行きたかったのかな——、フラフラしてたら親に怒られて、「いい加減にしろ」って言われて浪人に戻って普通の大学…埼玉大学に入り直して、そいつと友だちになってね。で、2つ上の奴でませてるからさ、結構ロマンチックなことを言うてるんだよ。山登りいっしょにあって、疲れたとか言って休んでたら。「工藤、音が遠くからしないか」、「うん、聞こえる」「いってみよう」って。音のする方に歩いていったら滝があつて。「滝だあああああ！」、「おお、滝だあ

ああああ！！」って。で、何でか知らないけど、そいつが突然ポケットからウィスキーの小瓶取り出して、クツと飲んで、「大地に向かって乾杯！」ってやったんだよ。そういうやつだったよ。結構ロマンチックでしょ。そういったロマンチックなやつがいたのよ、世界を股にかけようとかさ。「大自然に乾杯！」とかね。卒業したあとは大企業に職に就いたけどさ。なんだかねえ。

で、なんだっけ。今読みなおしたい本だっけ。まあ、さっきも言ったけれど、大江健三郎。『芽むしり仔撃ち』とか『飼育』とか読んだんだけどねえ…。あと、三島由紀夫。もうね、ひと通り読んだのよ。『豊饒の海』(『豊饒の海 春の雪』三島由紀夫著、新潮社、1969 シリーズもの) 何部作とか言ってね。とにかくひたすら読んだのね。それで、読んだものっていうのは、一応通り過ぎてはいるんだけど、見事に忘れて。あとは、中上健次とか。中上健次ってのは我々の頃でもまだヒーローだったよね。めちゃくちゃヒーロー。もうテレビに出てきて、喧嘩ばっかしやっている人。けども、彼の小説を読んでいた…彼、被差別部落の人なので、抗議もあるし過激な内容なんだけど読んでみると切なくて涙が出てくる。若い頃は分からないよ、そういった人間の弱さまで見えないからね。そういった意味で、年を取って読みなおしたくなるのは中上健次だよね。昔の現代小説、現代小説らしかった、大江とか中上とか読みなおしてみるのかなあ。昔の小説を読みなおしてみても、その小説家の弱さも見えたりするっていう…。もう、50も過ぎるとそんな感じになってくるよね。けどまあ、昔は分からずに読んでいて、その気になってカッコいいとか思ってたけれど、読みなおしてみても、いまでも自分の血肉になって残っているかっていったことを試してみるって感じかな。いいこと言ってんな、俺。

—— (笑)

工藤先生、今回は貴重なお話とお時間をありがとうございました。

先生にご紹介いただいた本は、本学図書館にも所蔵されているものもありますので、皆さん、ぜひ手に取ってみてください！

